

[INTERVIEW] Ichiya Nakamura

“失われた10年こそがクールだった”

経済大国と言われたのがまるで幻だったかのような90年代。経済は低迷し、希望が見えないまま混迷を続ける日本で、一方ではクールなポップ・カルチャーが世界的躍進を遂げた。はたしてこの間にいったい何が起きていたのか？そして日本はどこへ向かおうとしているのだろうか？ 学生時代は人気バンド「少年ナイフ」を発掘、郵政省ではT関連の部署で次世代のコミュニケーションに取り組み、現在はスタンフォード大学の日本センター研究所長を勤めるなど、ユニークな経歴を持つ中村伊知哉氏に聞いた。

「少年ナイフ」がブレイクした真相

山口 まずは、中村さんのプロフィールを語る上で欠かすことが出来ない「少年ナイフ」についてお聞きしたいと思います。「少年ナイフ」は中村さんがやっていたバンドと同じような時期のバンドなんですか？

中村 僕はその頃バンドをやってはいたんですけど、なんていったらいいのかな……見つけたんですよ。

山口 見つけた？

中村 そもそもは、「ボ・ガンボス」というバンドのどんどんとが「大阪の草むらで女がギターを弾いてて、それがやたら変なんだよ」と言うから、「行こう！」という話になったんです。それで草むらでギターを弾いてる彼女たちを初めて見たんですよ。変な歌を歌っているのがいいなあと思ったんです。最初は、「とにかく曲を作れ、でも練習はするな」とアドバイスしていたんです。4、5曲たまったらすぐライブ、みたいな感じで

した。彼女たちは、ギターとかちゃんと弾けなかったんで、Fとか押さえても音が出ないっていうような状態のままライブをして舞台上で間違っんです。そうなったら「すみませんでした」って謝って「もう1回最初からやります」(笑)

山口 本当ですか(笑)

中村 1回のライブで何曲できるかが勝負みたいな感じでやっていたから、お笑い系かなあ、と思っていたんですよ。それでも奇妙なファンの人達がいて、レコード出そうよみたいな話になったんです。

山口 それでプロデューサー的な立場になったんですね。「少年ナイフ」は大阪で活動していたはずなのに、それがなぜ海外で火が付いたんですか？

中村 全然わからないですね。

山口 中村さんのネットワークなんじゃないですか？

中村 それは全く違う。僕は「少年ナイフ」というのは“童謡パンク”だと思っていたので、その当時の

中村伊知哉
スタンフォード日本センター研究所長
1961年生、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド“少年ナイフ”のディレクターなどで活躍。84年郵政省入省。電気通信局、放送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は郵政大臣官房総務課課長補佐を務め、規制緩和、省庁再編に従事。98年に郵政省を退官後は、(株)CSK特別顧問に就く。同年に渡米し、マサチューセッツ工科大学(MIT)メディアラボ客員教授に就任。2002年9月からスタンフォード日本センター研究所長に就任。経済産業研究所コンサルティングフェロー、(社)音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」副理事長を兼務。著書に『インターネット、自由を我等に』(アスキー出版局)『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)などがある。

目標は、NHKの『みんなのうた』に出ることだったんですよ。

山口 なるほど。

中村 で、僕は音楽の才能を使い果たしたって思った瞬間があったので、音楽を諦めたわけです。これはもう一生分使ったからだめだと思って。それで役人になろうと思い、役人になったんですよ。郵政省に入っただけの頃、役人の権限をいぎたなく使ってNHKに乗りこみ、少年ナイフのレコードをばらまいて、「『みんなのうた』に出せ！」って言ったんですよ。

山口 すごい！

中村 もう全然怖いものなしでしたよ。そうしたらNHKの人に「なにを言ってるんだ！」とめっちゃくちゃ怒られました(笑)。あのレコード、あの人たちが今でも持っていたらすごく高く売れたと思いますけどね。僕はその頃、東京のインディーズのレコードを探しているというアメリカ人、イギリス人の若い連中とよく



会ってたんですけど、彼らが少年ナイフの作品を持って帰って、勝手に向こうのラジオとかで紹介してくれて、いつの間にか火が付いたんです。それから5、6年くらいして、マイクロソフトが世界コマーシャルでローリングストーンズの後釜に使うとか、ニルヴァーナが世界ツアーに連れてくとか、「なに言ってるの!」(笑)っていう話が向こうからくるようになったんです。

山口 でも、少年ナイフの「いつまで経っても未完成」みたいな感じは外国の人にはどのように映るんでしょう?

中村 音楽シーンとしては、プログレがあって、グラムがあってという、ロックの様式がある程度固まっちゃった時期に、ニューウェーブとかパンクが出てきたじゃないですか。破壊活動で、もう1回誰でも音楽って作って表現できる、こんなんでいいじゃないか、っていうムーブメントだったわけですね。

山口 原点に戻った?

中村 原点に戻って、その1番ピュアな感じでスポンといった大阪娘三人なんですよ。東洋の、片言しか英語がしゃべれなくて、ギターもろくに弾けない連中が、自分たちの好きなロックをポンってストレートに持ってきたんですね。音楽ってこれでいいじゃないかと。

山口 ど真ん中直球、みたいな。

中村 そうなんですね。だからニルヴァーナとかが面白がったと思うんですよ。

日本はなぜかっこいいのかを研究

山口 そもそも中村さんが官僚になられたきっかけは何だったのですか?

中村 郵政省に入りたかったんです。自分で音楽をやるのは諦めたんですけど、日本を、世界をコミュニケーションとか表現で溢れかえらせるみたいなことをお手伝いしたいなと思ったんです。



少年ナイフのファーストアルバム「HAPPY HOUR」ジャケットをまだ人気ブレイクする前の奈良美智が手がけたことでも有名。伝説のバンド「ニルヴァーナ」のヴォーカリスト、カート・コバーン(故人)が彼女たちを気に入ってコンサートの前座に起用したことで一気に海外のミュージシャンの間でも注目された

山口 もともとそういう明確な意思で郵政省を選択したのですね。ということは、やはりITが前提にあったわけですか?

中村 それ以外全然興味なくて、ずっとやっていたんです。でも、98年に、政府の立場にいるよりも、外に出てそういうことをやった方がフルスイングできるかなと思っていた時に、ちょうどMITで「メディアと子供の研究所」を作るので誰か来ないかという話があったんです。それで、当時のSEGA/CSK会長の大川功さんから「お前どうだ?」って言われて、行ったんですよ。タイミングと中身の両方がぴたっとハマったんですね。

山口 その時期は、東京には中村さんが思っていたことはできにくいとお考えになったのですか?

中村 いや、そんなことはないです。やろうと思ったらいくらでもできるんですが、海外に出た方がもっとできるかなと。



山口 MITって実際に最先端のテクノロジーを持っていたわけじゃないですか。行ってみてどのような感じでしたか？

中村 私が行った頃はITバブルの時期だったのですが、途中でバブルがはじけたので、みんながベコンとへこんでしまったんです。だから非常に元気なアメリカと嫌なアメリカの、両方を見ることができたわけですね。いい時に行ったなって思いますね。

山口 不勉強ですみません、バブルがはじけたのっていつ頃を指すんですか？

中村 2000年の春ですね。「はじけるぞ、はじけるぞ」と思って見ていたら、案の定そのタイミングではじけました。

山口 ただでさえポジティブで上昇志向が強い国が、バブルでまれにみる発展をとげたわけですからね。

中村 強気で、傲慢で（笑）。ただ、個人的には早くバブルがはじけて欲しいと思っていたんです。というの

は、アートも文化も、教育も、全てがビジネスの話に終始してしまっていたんですね。「それでいくらになるの？」っていう世界だったんです。それが嫌でした。バブルが終わったら、ようやく、美しさとかかっこよさ、かわいさとかいったものを考える世の中になった。言ってみれば、普通の世界なんですけどね。そうなれば「儲ける人間よりも、作る人間が大事」という価値観になるはずなんです。早くそういう“普通”の時代が来ないかと思っていたんですが、案外早く来ましたね。

山口 なるほど。ところで、中村さんは今、スタンフォード日本センター研究所に籍を置かれていますが、そちらでは何をやろうとお考えなのですか？

中村 いわゆるプロデューサーですね。僕のミッションは研究プロジェクトを作ることなんです。産・学・官かつ日米でプロジェクトを作ってくれとリクエストされています。とりあえず好きなことからという

ことで、今、力を入れているのがポップカルチャープロジェクトと、子供の表現のプロジェクトです。この2つを推し進めようと思っています。まあ、好き者を集めてプラットフォーム作ってワイワイ遊んでいるので、普通アカデミックでいうとプロジェクトでもなんでもないんですけど、研究だと称している、と（笑）

でも、ポップカルチャーのプロジェクトを始めようと言ったのは、ちょうど「Gross National Cool」が発表される少し前だったんですよ。スタンフォードにもそういう研究をやっていいかと、国際政治学者とかの意思決定権者の何人かに打診したら、向こうがすごくのってきたんです。というのも、向こうの方が、客観的に日本を見られたからだと思います。今の、ポップカルチャーブームは、結局は外から発見されたってことじゃないですか。

山口 マグレイさんも、お話の中で外から見てるか内から見てるかっていうのは、ポイントにしていまし



たね。

中村 僕は、日本人がやっていることをずっと「かっこいい」と思っていたんです。でも、外に向けて「僕らはこんなにかっこいいぞ」って言うほどのことが、言うのがかっこいいことなのか、とかいろいろ考えてしまうんですね。

山口 口に出したとたんにかっこ悪くなることもありますよね。

中村 自分がかっこいいことを「俺がかっこいいだろう」というのはなんか布袋（寅泰）さんみたいで（笑）。言いにくいと考えるのが日本人だったと思うんですね。だから、外から「あんたたちかっこいいね」といわれると、「いや、そんなことはわかっているよ」と。それを、「自分たちかっこいい」というのを研究してみてくださいと言われたので、「じゃあしょうがない、やってやるか」みたいな感じですね。

失われた10年が富国強兵を過去のものにした

山口 私も参加させていただいた総務省のデジコンこと「新しいコンテンツ政策を考える研究会」についてお聞きしたいと思います。私はデジコンの各構成員が提出したリポートが非常に興味深くて、繰り返し読ませていただきました。その中の公式見解として、日本の90年代は経済の停滞などがあって「失われた10年」という言われ方をしています。でも、実はその10年間にこそ、マッグレイさんが言っているような、日本のかっこよくて面白い、アニメ、マンガ、ファッション、建築、現代アートといったものが、実は静かに醸造されていたわけですね。中村さんはどうお考えになっていますか？

中村 僕は、その10年の間に過去100年を清算したと思っているんですよ。日本は100年前、明治政府になって、富国強兵というスローガンを掲げて列強にゴマすっ

ていって、近代化の道を明確に取ることにしたんですね。ところが、富国強兵の「強兵」の部分は60年前に戦争に負けたんでそこでやめました、と。「富国」だけはずっとやってきたわけですが、これはまさに経済産業の発達歴史そのものだったわけです。そして、失われた10年の間には産業が失敗したことが明確になり、過去100年間、ずっと国づくりをしてきたスローガンがやっとそこで死んだ感じがするんですよ。

そうすると、では、この国のアイデンティティとは何かということをもう1回見直さなきゃいけないと思っただんです。その時に、日本ってクールだったんじゃないか？ ってことに改めて気づいたんですね。冗談ではなく、日本は1000年くらいの間、ずっとかっこよかったです。と言うのも、江戸時代には強兵も産業の発達もなかったけれども、民が楽しく、かっこよく粋に生きようとしたし、生きていた。

山口 楽しんでますよね。

中村 それが今、復活しているというか、外からもう1回見直されているというふうに私はとらえているんですよ。たとえば、ちょっと前のアメリカ人だったら、日本のイメージはカミカゼ、ハラキリだった。その後、僕らの世代になると、ソニー、ホンダ、トヨタに変わった。つまり、強兵から富国になってきたわけですね。今、外国人の子供たちに日本のことを知っているかと聞くと、必ずピカチュウ、ドラゴンボールZ、スーパーマリオブラザーズ、セーラームーンという答えが返ってくる。

山口 そうですね。

中村 いいことかどうかは別にして、がらっとイメージを変えたのは、90年代なんでしょうね。

山口 その間にインターネットとか、メディアの質が変わってきた点も大きいのではないのでしょうか？

中村 たまたまだと思いますけどね。今、日本がクールだと言われているのが、はたしてこれからもクール

かどうかが問題なんです。単なるバブル、クールバブルで終わってしまうんじゃないかという、大変な恐怖があるわけですね。アーティストやクリエイターたちをないがしろにしていると必ずそうなりますよ。

山口 そうなんですよ。

中村 今の問題は、世の中が一斉にデジタルになり、ネットワークが世界的に張り巡らされてボーダレスになった時に、そのクールさを世界にずっと発信し続けられるか？これをキープするメカニズムがあるのか？というのが、総務省のデジコンの最大のテーマだったと思うんです。

山口 その辺をみんなが意識するかどうかでしょうね。マッグレイさんが「Gross National Cool」で言っている重要な指摘は、ソフトパワーが一番消費者に近いところ、つまりコミュニケーションのポイントに、非常に近いところにあるということです。食べたり飲んだりとか、アートもそうですし。コミュニケーションツー

ルとしての流通経路を、日本が握ってしまう可能性があると言っているわけですね。ただ、一見誉めているようですが、実はもしかしたら「このままでは危ないよ」という含みがあるのではないかと私は思っているんです。

中村 本当だったら世界が気づいてもおかしくない時期ですから、僕もこれは非常に危ないと思わなければいけない時期だと思いますよ。デジコンでもいろいろな議論が出てきたのですが、日本がクールだとか強いということの源泉は何かというと、庶民レベルの審美眼とか、表現力にあるのではないのでしょうか。つまり、トップクリエイターの創造力以上に、みんなの力が秀でているからではないのかということです。

山口 でも、現実にはどうなんですか？

中村 僕は今の若い人たちのやっていることを見てみると、結構樂觀視できるというか、期待しているんですけどね。



山口 誰から頼まれたわけでもないのに、自然発生的にやりだす。「なぜなら楽しいから」みたいな雰囲気は私は感じるんです。デジコンの会議の中で、私が「日本のポップアートは草の根的に出てきたのでは」と言ったら、あの時出席しておられた東浩紀さんや毛利嘉孝先生も同じ意見でした。つまり、日本のポップアートはアメリカ型のポップアートと違うということなのです。それはどういうことかということ、日本にはクラス（階級）がないということが、ものすごく大きいファクターとしてあるのではないかと。

中村 具体的に言うとうどういことですか？

山口 クラスがはっきりしていると、現代アートを買集めるってコレクターの存在理由が明確になるのです。そもそも、階級社会があると、世の中は退廃していきます。お金持ちはお金で手に入れられない、見たことがないものを見たいし知りたい。それは人間の業みたいなものなんですね。歴史的に見て、ビッグ

コレクターになっていく人たちには、そういう習性があると思うのです。ところが、日本にはあまりそのような社会的背景がない。なんとなく「みんな中流」という意識がある。私を買わなくても、誰かが買うという感覚になっているのではないのでしょうか。

中村 クラスがなくてみんなが中道的で幸せっていうのは、大衆の表現力とかを生んでいくという意味ではない面もあるでしょう。でも、抑圧されているクラスがないがゆえに、パンクなアーティストが出てこない面もあるわけですね。

山口 そうです。

中村 最近、音楽業界が非常に危険だと感じるのは、産業として規模が小さくなっている以上に、かっこいいと思われなくなっていることです。

山口 音楽をやることが？

中村 ミュージシャンが不良じゃないんですよ。僕らが若い頃はまだギター持っているだけで不良と言われ

た。不良だとモテると思って、それだけのためにギターを持ったり、バイクに乗ったりしていたわけです。でも、今ギターを持っていたら、ひとつの目的に向かってちゃんとした活動をやって、えらい子になるわけですよ。それじゃあダメで、もう一回不良のテリトリーにしてやらないと、かっこよくなりませんよ。

山口 確かに。

中村 今は不良になりにくくてしょうがない時代なんですね。だから、最近ものすごい犯罪を犯す子供って、普通の恰好をしている。

山口 逆に不気味ですね。

中村 いい子と普通の子があった上で不良というゾーンがあれば、彼らはそこで不良になれたのに、それがなくなってしまった。不良ゾーンで消化したり、発散できたりしたかもしれないのに、それがないからギリギリのところを超えてしまう。犯罪者までいかないといけないんですよ。

「新しいコンテンツ政策のための10か条」

第一条 文明として考えること

第二条 総合的コンテンツ政策を構築すること

第三条 国民の表現力と発進力を底上げすること

第四条 ポップ政策を強化すること

第五条 人材の育成を推進すること

第六条 政策の産業基盤を拡充すること

第七条 流通構造を改革すること

第八条 安心・安全な消費環境を確立すること

第九条 地域のアイデンティティの確立を促すこと

第十条 コンテンツからみた技術政策を展開すること

情報通信ソフト懇談会デジタルコンテンツワーキンググループ「新しいコンテンツ政策を考える研究会」最終報告書より

山口 確かにそうかもしれません。

中村 だから、ネットの世界とかデジタルの世界も、不良のたまり場をどこかで作ってやらないといけないんですよ。あまりいい子いい子ってやっているのは逆に危ない。

山口 そういうことで言えば、今私が参加しているメーリングリストに「2ちゃんねる」の話題が出ていたのですが、そこで主宰者の西村ひろゆきさんご本人が2ちゃんねる擁護論を展開していて感動しましたよ。

中村 彼も一途ですよ。

GNCというネーミングの巧みさ

山口 「新しいコンテンツ政策を考える研究会」の最終的なレポートとして、10箇条が挙がっていました。あの中で、中村さんが1番推したいポイントはどこですか？

中村 それは難しいですね。最初の3つ、4つぐらいが、これまでのコンテンツのポリシーを大転換しろと主張しているのですが、そのへんがポイントとなります。まず、第1に100年先を考えて政策を立てるということ。アマチュアの、つまりみんなで表現する時代になるということに政策をシフトしろというのが2点目ですね。で、3点目が、本気でやるのだと。ちまちました予算措置とか言わないで、100年かけてとにかくやれということですね。この分野がいかに重要なのかを認知して、大いにやる気を出してもらいたかったのです。だから、デジコンのメンバーはできるだけエッジを立ててこの政策案を書いたわけです。総務省って1つの官庁ですけど、あのまま通ったというのは、結構変わってきたなって感じがしますね。

山口 各省庁とのおつきあいの長い中村さんから見ても、すごく画期的なことだったわけですね？

中村 言っていることは結構過激だと思いますよ。僕

は10年前に同じような研究会を、旧郵政省の担当補佐としてやりましたが、あの時だったら絶対通らなかったでしょうね。

山口 それは、官僚の皆さんも世代交代をしているせいでしょうか？

中村 政策が手詰まりなんだと思います。

山口 だから本音に通じるようになってきたのでしょうか？

中村 そうですね。あれで終わりじゃなくて、あれをきっかけに皆でもっといろいろ言えればいいと思いますよ。必ずしも正しいことばかり発言しているわけではないですからね。それに、高尚なことを言っているわけじゃない。やいのやいの言えればいいと思いますよ。

山口 そうですよ。知っている人にとってはともかく、知らない人にとってはびっくりするような話だと思います。

中村 政府の役割というのは、彼らが気付くのと同時

に、情報の発信源になって欲しいんです。そして、みんなに「これはこういうことなんだ」と宣伝してくれればいいのですよ。

山口 私は、マッグレイさんの「Gross National Cool」というネーミングが上手かったと思ってるんです。でも、彼に直接話をいろいろ聞いてみると、ただの一度もクールっていう単語が出てこないんです。それで最後に、「あなたがクールと表現していたことは実はパワーという意味なのでは？」と質問したんです。そうしたら、「本当はパワーなんだけど、Gross National PowerというとGNPと同じになってしまうから、Cにした」と（笑）

中村 彼がそれを書いた頃に、僕はたまたまスタンフォードの政治学者たちと話していて、日本のポップカルチャーを研究するプロジェクトをやったらどうだと冗談で言っていたんです。そうしたら、彼らが、「GNPじゃなくて、GNPPにしたらどうだ？」と。それは、

「Gross National Pop Power」という意味なんですが、「いいじゃないか！」と答えました（笑）。その時点ですぐにどこかで発表していたら、GNCではなくてGNPPになっていたかもしれない。

山口 そうですね（笑）

中村 この間、そのスタンフォードの人たちに会ったら「もっと早く言っておけばよかった」と言っていましたよ。でも、本当にじっくりするのはどちらかというと、山口さんがおっしゃるように「パワー」ですよ。

山口 そうなんです。GNCが非常に上手いネーミングだと思うのは、人に言いたくなるような話だということなんですよ。伝染力というか、「この間こんな読んじゃってさあ」とか、「ダグラスさんの文章読んだら」って人に伝播する力が、GNCという言葉にはあったんですよ。

中村 同感です。

山口 国民総クールと言われると悪い気はしないです

しね。「ほんとかなあ」とか思いつつも、上手いネーミングだったなあ、とあらためて感心します。

中村 市場として非常に有望ですから、日本としてアジアを考えましょうというのは当然ありますよね。それから、アジアって人口が多いですから、デジタル化すると本当に力が強くなってくると思います。みんなが表現とか発表の手段を持つようになると、結局人口の勝負になってきますからね。

山口 多勢に無勢っていうやつですね。

中村 はい。アメリカはインターネットを世界中に広げるのは、アメリカのものを売っていくというか、アメリカの力を発揮するための手段だと考えていたふしがあります。たぶん間違いですね。人口10億人の国がデジタル化してネットワークを持ったら、そこが世界に対してパワー持ちますよ。アジアのパワーは、これから確実に伸びます。今は日本のポップカルチャーが少し抜け出している気がしますけど、それもひとつ

のきっかけになって、アジアの面白さに世界がこれからももっともって気がついてくると思うんですよ。

僕がアジアの男もカッコいいなと思ったのは、北野武監督の「ソナチネ」を観た時です。「いやぁ、アジア人カッコいい」と。それまで、アングロサクソンっていうか、白人カッコいいよね、っていう時代が長くありました。その後、バスケットとかアメフト選手などの影響で、急にアメリカが黒人カッコいいよね、っていうふうになってきた。でも、「ソナチネ」を見て以来、アジア人の立ち居振る舞いのエレガントさみたいなものを上手く発信していければなぁ、と思いましたね。

山口 確かにそうです。そういったことを言語化するよりは、ビジュアル化した方が伝えやすいと思うので、やはり、現代アートのアーティストたちに頑張ってもらいたいな、っていうのが私の結論ですね。彼らのコンセプトというか、猛烈に何か伝えなきゃいけないっていう意思が私は弱いと思っているんです。だから、

彼らが社会の中で必要とされているんだということをきちんと伝えてあげると、もっと頑張り始めるんじゃないかと期待しているんですね。表現活動をやっている以上は、ずっとアンダーグラウンドでいいわけじゃないですか。例えば、バンドを始めた人が、どんなに下手でも、夢は武道館、東京ドームだと思うんですよ。そうじゃなかったら、音楽を人前でやろうとは思わないでしょう。だから、アーティストたちも、いつまでたっても銀座の貸画廊でいいと思っているはずがないんですね。作品を描いて発表する以上は、一人でも多くの人に観てもらいたいというのは健全な精神だと思います。そういうことをアーティストたちが語っても恥ずかしくないような立場になってもらいたいですね。

中村 世の中がクリエイターをリスペクトするようになるということですね。

山口 本当にそう思います。新しい何かが始まるのな

ら、そのあたりから変革したいですね。本日はありがとうございました。

